

の藤の木や下飯盛八幡の大楠にも匹敵するようである。

鍛冶屋の天満宮は、昔は現在の馬場平吾住宅の東部にあったらしく、明治四十年の「宮寄せ」——の法律によって、佐賀市本庄町鹿の子天満宮へ寄せ宮を余儀なくさせられ、当時の鳥居及び山犬等も移転してしまった。鹿の子天満宮を見ると、現在二重の大鳥居があるがその一対は、この鍛冶屋より移転寄進のものである。このことは東与賀の古地図でも証明されるところである。したがって鍛冶屋の天満宮には、鳥居や社殿もなく、小高い地所に二坪の御堂があり、菅公（菅原道真）の木像を祀つてある。製作者も年代も不明。

この御堂の側に、稻荷大明神の石碑がある。これは安政二年（一八五五）の建立である。それと並んで南無阿彌陀仏碑があるが、宝暦四年（一七五四）のものである。その他万霊塔安永七年（一七七八）明治十一年再建施主は、当村辻小路九人——とある。こうした混祀や寄せ神の例は他にも見られない珍しいものである。

この鍛冶屋天神の祇園は、船津八幡宮の祇園と共に往時は非常に盛大であった。毎年八月一日には天神前の広場には、とうばた（紙凧）をはじめ、おもちゃ等の出店が並び、境内の北側の畑には踊り舞台もできて、夜は遅くまでにぎわつたものである。しかし、この祇園祭りも時代の推移とともに消え失せて、最後は大正五年で終止符を打つたのである。最後を飾るために各家々では紙で作つた角燈籠の提灯を軒先に立て、ほのかなる献燈に誘われて老若男女の群れが浴衣がけて団扇片手に集い興じた姿は、尚今日でも旧き時代の名残として想い出されるのである。

この村落の北西端に、昔の古刹潮音寺の跡がある。「九州治乱記」によると天文二年（一五三三）に龍造寺隆信が、若宮八幡宮（上町）の神宣によって、飯盛城（本庄町上飯盛）の高木鑑房を攻略した時の陣所跡である。佐

賀県史には次のような記録がある。

佐嘉郡実久村 海雲山 潮音寺

一、當寺儀は元來慶聞寺末寺に有之候処年来及大破候得共余多く末寺にて本寺よりも修復等不及に候に付從高傳寺修復等相加置候間高傳寺末寺に被仰付度く高傳寺へ從慶聞寺相願候処被達御年に天明七年末七月願之通被仰付候事

なお、この潮音寺に所属する田屋敷は三反九畝二四歩、地米も二石七斗三升四合と記録されてるので、全盛の頃は相当に大きい寺院であつたことが想像され、現在も「万部経」が秘蔵されている。こうして昔を誇つた潮音寺も、戦後の農地解放によって、免田もすべては小作人に渡り、現在では一字の御堂と数十基の墓地のみが淋しく残されている。実に人の世は諸行無常、色移り香も失せて滔々と鳴りし潮の音も、既に跡絶えて聞こうにも聞けない今日この頃である。



潮音寺

津

四 船 津

船

船津は東与賀町で一番東北部に位置し、東は八田江を隔てて川副町西船津に相對し、北は立野に西は上町、南

は今町に接している。言わばこの船津は八田江によって昔から産業上・交通上・生活上の便益や恩恵を受けて次第に繁栄し発展したものである。

この八田江は川副郷と与賀郷の境を南へ流れ、八丁井樋で有明海に流れ込んでいる。昭和十七年佐賀江の枝吉樋門が完成して悪水を排出するようになったが、以前は大崎川の末端の本庄町西八田と北川副町東八田の樋管が起点であった。平常は水が少ないが雨期には枝吉樋門等を解放するので水量が増す。海口の八丁井樋の開閉で満潮時は淡水を導入することができる。即ち佐房（西川副）と今町間に、この八田江淡水導入の樋門ができて、水田の灌漑や飲料用水等必要欠くべからざる河川である。大正四・五年の「東与賀郷土調査」に次の記事がある。

今カラ凡ソ三百年許り前鍋島直茂公ノ時、成富兵庫茂安ノ設計ニカカワリ築キシモノデ、故老ノ話ニ本江ハ兵法上必要ナル所デアルトモ云ヒマス維新前マデハ藩主カラ莫大ナ資金ト多数ノ役夫トラ遣ッテ浚ラヘラナシテキタノデ運送船ナドモ八田宿マデハ自由ニ往来ガ出来タソウダ今ハ北川副・西川副・本荘・東与賀ノ四ヶ村ノ組合デ支配シテキマスガ僅カ漁船ガ船津ノ南マデ通フ位デアル

右のように遠く藩政時代から毎年二・三回は公役として、その沿岸の住民数百人を出夫して、泥土さらえ作業を行ったのである。それで船津までは勿論のこと漁船や荷物船など上流の本庄町八田村辺りまで堤防の松並木を眺めながら出入りしたという。しかし有明海の干潟が堆積土のために漸次高くなって、この八田江も年々と浅くなり船の運航はできなくなりつつある。この事は前記「東与賀村の住民生業の変遷」——として次の記録がある。文政元年（一八一八年）頃まで、船津川は大きく流れて船の通行便利にて、流域にある船津地区の住民はほと

んど漁業を営んでいたものである。その後船津川が次第に埋まり船の通行が全く不自由となり、日と共に漁業は減少し現在僅かに一割足らずの影をとどめるのみ。現今では大部分商業や他の仕事で生計を立つるに余儀なくせられている。

本誌の表紙口絵に掲げる「八田江周辺の絵図」——は、現在佐賀市本庄町に居住する野中時次（年齢八〇歳）の描いた貴重な作品である。彼はこの船津に生を享けこの土地に育み、旧制佐賀中学校時代まで船津の生家に住んでいた。当時の記憶をたどりながら、大正時代から昭和初期にかけての八田江とその沿岸の家並の模様を再現した風俗絵画である。「ガオ」は有明海の潮で浅くなる川底をかくはんして、泥を川下へ流す舟のこと。左右の兩岸から各五人ずつこの舟を引っ張って作業をしている。この八田江の兩岸に立ち並ぶ民家や共同井戸それに船津神社の鳥居等、昔の状況を克明に表現され興味深くも有り難い絵図である。この絵図と今日の船津大橋写真を対比して観察すると、感慨は更に新たなものを痛感する。

津 船

この村落の北端に、船津八幡宮を祀っている。創立四百年とあるが、その年月は不詳である。元禄の頃の創建とも言われ、佐賀市本庄町の鹿の子八幡神社との関係が深い。これは実久の村岡道栄宅に保存される「八幡宮遷座の絵図」——によって証明されるようである。もともとこの「船津」——は「鹿の子船津」——の名称が今日も残っており村落の形成上関係が濃厚である。宮の鳥居には「安永七年戊戌四月吉日奉寄進御宝前」——と刻まれ、施主副島内蔵



船津大橋

之介外四名の銘があり今から約二百年前のものである。八幡宮における宮祭りの番帳さんが現在残っている。元禄時代の古い紙片に書かれたものであるが、その番帳さんに紺屋や油屋等の家業名が記されている。これらによって当時の集落の状況も想像されるのである。しかも農家は米の利息金でお祭りをやったが、漸次に農家が減少したために、宮祭りもできなくなった―等の記録も残っている。

この境内には天照皇太神宮の大石―元禄七年甲戌二月十一日建立をはじめ、明治・大正・時代に奉納された盥漱・狛犬や、また昭和十三年奉獻の燈籠等が数多く並べられて、村落民の信仰心の厚さが証明され嬉しい限りである。明治・大正・昭和と戦前までは東与賀村における三大村社の一つとして地域住民の崇敬が広がったのもここに大きく起因するものである。

お蔵

この「お蔵」は穀倉のことで、昔上納米を貯蔵したりここから船で運んだ所であるが、船津の「お蔵」は龍造寺隆信公の頃、鷹や鴨狩りの跡とも言われている。現在の古川国武宅の西側がその地所であるらしい。即ち米・麦をはじめ肥料や粉炭等を積んだ船舶や木材をいかだにして、この「お蔵」近くまで運んで来ていた。そのためこの船津は昔より家業の職種が非常に多かつた。まず、人が集まると酒類であるが、酒屋は故大石平次（酒倉が四棟並ぶ）、炭問屋は吉原、旅館（昔の木賃宿）の力武、その他銭湯・紺屋や精米業の秀島、医院の久納等、往時より各種各様の職業が賑やかに活気づいていた。言わば東与賀村では一番の開拓村であり進歩的文化村であった。即ち精米業も東与賀では最も早く発動機利用の先端を行き、各家庭の電燈も福岡県大川市より川副町犬井道

へ―それが漸次西部方面に波及して、広江そしてこの船津へと点燈されたのである。電気の世の中となつて最初に恩恵を受けたのが船津であり、一番遅く灯つたのは大野村であるが、それは大正五年の頃であつた。まさにこの船津は、天恵の八田江によつて生まれ発展した郷土東与賀の発祥の地ともいふべきであろう。

五上町

上町については貞享四年（一六八七年）の郷村一覧に、実久村の中に「上町」の字名が出ている。したがつて今から約三百年前には既に村落としての形態ができていたのである。昔は小高い島であつて、その周囲や真ん中辺りに縦堀や横堀が幾筋も流れていた。今日なお「島の内」とか「島の中」―等の地名が残っているのはその事を証明している。やはり人間の生活上この堀が必要で、この邑の住宅のほとんどが堀岸にあつたり堀を裏側に持っている。そしてこの村にも「郷倉」の跡（副島達美宅の北側）があつたが完全に堀に囲まれて、出入口はただ一つに限られていたという。

現在の世帯数は僅かに二〇戸で本町内で最も少ない小邑であるが、昔からの地域としては現在の船津南や今町付近にまで広がりがあつたという。この小邑に古刹の妙福寺と若宮さんを祀つた宇堂がある。妙福寺は本願寺派の浄土真宗で寛永十五年の創建、開基は高木宗運であり現在の本堂は昭和五年六月に改築されてある。若宮社は外観上神社らしい宇堂ではないが、社殿内に入ると三尊の御神体が祀られてある。中央に薬玉を持つ若宮さんの